



家政婦は蜜尻女子大生

初恋の君と恋人の甘いご奉仕

庵乃音人

挿絵／阿川椋

立ち読み版

第一章	暗闇のなかで弄くる恋人のおっぱい……………	4
第二章	初体験はシャワールームで全裸立ちバック……………	20
第三章	美人家政婦のいやらしすぎる手コキ……………	70
第四章	家政婦、恥辱の全裸公開放尿……………	107
第五章	恋人の肛門に酔い痴れる夜……………	167
第六章	初恋の君の蜜尻顔面騎乗……………	220
第七章	巨尻と精液だらけの淫らな宴……………	249



登場人物

Characters

山浦 裕

(やまうら ゆう)

今冬に受験を控えた高校三年生。
女性の大きなお尻に心惹かれる性癖の持ち主。

愛原 紬

(あいばら つむぎ)

親が不在の山浦家にやってきた住み込みの家政婦。豊満なボディと母性的な人柄を備えた大人の女性。

柊 遥香

(ひいらぎ はるか)

裕の二つ年上の恋人。裕の高校時代の部活の先輩で、現在は都内の名門お嬢様大学に通う女子大生。

ガラス壁に手を突いて後ろに尻を突き出す自分の姿を見てしまった遥香は、プリプリと淫尻をくねらせて恥じらった。しかし、そんな遥香の羞恥にかられる愛らしい姿が、逆に裕をいっそう燃え上がらせてしまう。

「先輩、僕もう。ううっ」

喘ぐように呼吸しながら、肉を弾ませる双子の桃尻を驚掴みにした。肉まんでも割るみたいに、柔らかな臀肉をくぱっと左右に割り開く。

「きゃあつ。いや、お尻なんて広げちゃいや。元に戻して、裕君」

「んあああ。せ、先輩」

露わになった臀裂の底を、息をすることさえ忘れ、目を見開いて凝視した。

「せ、先輩。こ、肛門……肛門の周りにも、毛がいっぱい」

歓喜の吐息とともに、思わず目にした卑猥な光景をそのまま言葉にする。

「や、やだ。見ないで。裕君、私恥ずかしい」

裕の指摘に、遥香はいたたまれなさそうに尻を振っていやがる。裕はそんな恋人の尻尻をがっしと掴み、力任せに自由を拘束して、さらに目を皿にした。

皺々の肉の窄まりは、淡い鳶色をしていた。その周りにちろちろと、俗にいう「尻毛」が生え茂っている。恥丘の剛毛を見たときから「もしかしたら」と想像していた

が、期待にたがわぬ猥褻な眺めだ。

「ああ、先輩。いやらしい、お尻の毛……」

裕は震える指を臀裂の底に伸ばし、お湯のせいで谷間の肉に張りついた尻毛たちを摘んで、クイッククイックと引っ張った。

「ひいい。な、何してるの、裕君。やだやだ。お尻の毛、引っ張らないで」

「そんなこと言われても、先輩。ううっ、僕、おかしくなりそうです……」

いやがられればいやがられるほど、遥香をもっと恥ずかしがらせてみたいという欲望が肥大した。いつも快活で、自ら積極的にスキンシップを取ってくる遥香が愛らしく恥じらう姿に、日常とのギャップを感じて嗜虐心を煽られる。

（先輩、可愛すぎる）

裕はさつきまでよりも少しだけ力を加え、尻毛を引っ張った。

根元の毛穴が盛りあがり、ブツブツができる。絶え間なく降り注ぐシャワーのお湯が遥香の背中を伝い流れ、臀裂の底にも流れ込んで床に滴り落ちた。

「ああん、もう許して。お尻の毛、いやああ……」

「遥香先輩。んっ……」

指で責めるだけでは我慢できなくなった。双子の尻肉を再び左右に割り、今度は舌

を突き出して肉の窄まりの中心にヌチョツと突き刺す。

「あひいん。やん、やめて。舐めないで。汚いわ、裕君、そ、そんなとこ……」

遥香は電流でも浴びたようにひくんと女体を震わせ、またも激しく尻を振る。

「汚くないです。んっ……先輩の身体なら、僕、ちつとも汚いなんて」

裕は右へ左へと暴れたがる尻肉を押さえつけ、舌で肛門を蹂躪した。

ザラザラした肉の皺々が舌に心地いい。いやがってか、それとも感じてか。イソギンチャクを思わせる肛門がヒクヒクと弛緩と収縮を繰り返す。

「あん、恥ずかしい。あうっ、お尻の穴なんて。あはあ……」

舐めれば舐めるほど淫悦が膨張した。肛門から、尻毛を生やしたその周囲へと矛先を変え、尻毛をちろちろと舌で舐める。

「ああ、いやん。舐めないで、何してるの、裕君。いや。いやいやあ……」

「先輩のお尻の毛、舐めてるんです。ああ、興奮する」

舌で舐めるたびに縮れた尻毛がねつとりと唾液をまぶされて、あっちへこっちへと向きを変える。舌をチクチクと刺すように刺激してくる毛先の感触もたまらなかった。

さつきまで責め立てていた媚肉からは、蜂蜜を思わせるネバネバした汁が大量に溢れ出してくる。遥香もまた猛烈に感じているのだと分かり、裕の発奮はさらに増した。

「ううっ、またお尻の毛……あぁん、恥ずかしい」

「せ、先輩。僕もう……どうしようもなくなってきました」

いくらだつて尻肉を揉み、臀裂の底の肛門や尻毛を齧っていたが、このままだと何もしていないのにペニスが暴発してしまいそうだ。裕は立ちバック姿の遥香の背後に立ち上がり、腰を落としてぬめる女陰にヌチャヌチャと亀頭を擦りつけた。

「ふわっ、あぁん、裕君、ここで……するの？ あっ、やん、感じちゃう」

洗面所の大きな鏡に、曇ったガラス壁に手を突いて艶めかしく尻を振る全裸の遥香が映っていた。その後ろに見える自分の顔も相当に紅潮している。

「だって、もう我慢できないんです。い、入れていいですか？」

鏡に映る遥香のエロチックな姿を見ながら一つに繋がりたいという密かな欲望も、強引な行為を後押しした。

「ううっ、裕君」

「だめ」とは言われなかった。恥ずかしそうにかぶりを振りつつも、さらに両脚を開いて裕の挿入を待つ体勢になる。

(ぼ、僕、とうとう遥香先輩と……)

待望の瞬間がやってきたことに歓喜し、鳥肌が立った。ぬめる媚肉に擦りつける亀

頭からしぶくような快感が爆ぜる。それだけでも、相当な気持ちよさだ。

(これでオマ○コのなかなになって入ったら、どうなっちゃうんだろう)

その答えはもうすぐ分かる。

裕はグッと両脚を踏ん張り、肉ビラのなかに陰茎を押し込んだ。が――。

「ああっ。あああ、裕君……」

「こ、ここでもいいんですよね？ あれ……」

すぐに肉のワレメに怒張が飛びこむかと思った。だが牝肉は、蠱惑的な弾力とともに亀頭を押し返すばかりだ。裕は狼狽し、力任せに何度も腰を突き出す。

「あああ、も、もう少し下……下よ……アン、もう少し……」

「えっと……ああ、あれ。ここ、ですか……あっ！」

「ふわあああ！」

突然、ヌルヌルして窮屈な肉の重なるのなかに陰茎が埋まった。遥香が背筋をしならせ、天に向かつて顎を突き上げる。

(う、うわっ、何これ。ちょ、ちよつと待って。うわっ、気持ちいい……)

ズブズブと根元までペニスを挿入しながら、裕は必死に肛門括約筋を窄めた。そうでもしなければ、今にも射精してしまいそうだ。

(ううつ、ヌルヌルして……ゴツゴツしたオマ○コの肉が亀頭に擦れて……こ、これ、気持ちよすぎるよ。信じられない……)

「あうつ、い、痛い……」

(えっ。あっ!)

生涯初体験の膣挿入の恍惚感にうっとりとした裕は、痛々しさを滲ませた遥香の声を聞き、我に返った。見れば、裕の男根をズッポリと咥え込んだ初々しい媚肉からは、目にも鮮やかな破瓜の鮮血が溢れ出している。

「せ、先輩、ごめんなさい。抜きますか?」

鏡は、苦痛に美貌をしかめる遥香の姿を映し出していた。

そうだった。遥香は裕のペニスによって処女を失ったのだ。

「ぬ、抜かないで。抜いちゃいや。痛いのは……覚悟してたから」

裕の言葉に、遥香はいいやいやとかぶりを振って答えた。

「でも……」

「一緒に……大人になれたね、裕君」

痛みをこらえながら振り向き、泣き笑いのような可愛い顔つきになって言う。

「遥香先輩」

「動いて。私の身体で気持ちよくなって」

「いや、でも……」

「いいから動いて。裕君に気持ちよくなってもらいたいの。私はいいから……」

もうたまらなかった。こんな愛らしいことを言われて幸せを感じない男などいようはずもない。裕はくびれた細腰を両手で掴み、ゆつくりと腰を振り始めた。

(ああ、とうとう僕、遥香先輩と一つに……感激だ……)

ぬちゃ。ぐちゅ。ぐちゅる……。

「あうっ、あああ……」

「あつ。や、やつぱり痛いですか？」

「気にしないでいいの。もつと……裕君もつと！」

「ううっ、先輩……」

遥香に煽られ、腰の前後動を加速させた。遥香の媚肉は破瓜の鮮血と愛液が混じりあい、肉棒を入れたり出したりするたびにヌチヨヌチヨと下品な汁音を立てる。

裕も遥香もゲリラ豪雨のようなシャワーを浴び、髪も肌も全身濡れ鼠^{ねずみ}だ。

「ふわっ、ああ、裕君、感じてる？ 私の身体、裕君を気持ちよくさせられてる？」

遥香はバックから次第に激しく突かれ、上半身をガラス壁にぺたりとくっつけなが

ら、色っぽい声で聞いてきた。女体を艶めかしく濡らすのはお湯だけではなかった。たっぷり汗をかき始めた年上の恋人の身体から甘い芳香が立ちのぼる。

「は、はい、気持ちいいです。こんなに気持ちいいものだなんて思いませんでした」
本音だった。正直、オナニーで得られる快感など比ではない。

入れても出しても肉傘が膣壁の凹凸と擦れあい、火花が閃くような快美感が爆ぜた。股間を叩きつけるたびにブルブルと波打って震える尻肉の眺めにも恥悦を炙られる。

「あん、動いてる。お腹の底で、裕君の熱くて硬い、おちんちんが、んはぁ……」
「ま、まだ……痛いですか？」

そう聞くと、遥香は恥ずかしそうにかぶりを振った。

「ちよつとだけ、まだ痛いけど。でも、さつきよりはずっと……あ、ふわっ」

唇から漏れ出す声に、少しずつ苦悶ではなく淫らな艶が滲み出してきた。

（す、少しでも、先輩も気持ちよくなってくれば……）

痛がる遥香に「萌え」てしまうのは事実だったが、いつまでもつらい思いはさせたくない。自分が感じる、これ以上はないほどの気持ちよさの半分でもいいから、遥香にも快感を味わってほしかった。

（そ、それにしても……あぁ、気持ちよすぎる）

「アン、裕君、あうっ、ああ、すごい。あつ、んふうわああ……」

抜き差しするたびに、肉はもちろん骨までも髄のようにとろけてしまふような恍惚感に酔い痴れながら、裕は知らず知らずピストンを荒々しいものに変えた。

バックからガツガツと突かれた遥香は爪先立ちになつて尻を背後に突き出し、背筋を弓のようにならせてガラス壁に体重を預けている。

（あつ、先輩のおっぱいがガラスでつぶれて。ああ、いやらしい）

目の前の鏡に映る遥香の乳房はガラスに圧迫されて鏡餅のようにならびやがっていた。

裕が後ろから腰を叩きつけるたびに、押しつけられる乳房の面積が広がり、卑猥な白い円が大きくなる。乳房は変な角度に曲がつたままガラスに擦れていた。

「ふわっ、あうっ、ああん、裕君。あつあつ、あはああ……」

遥香は乳房だけでなく、両手と片頬もガラスに張りつけ、尻上がりに獐猛さを増す裕の子作り行為を受け止めていた。凜々しさを感ぜさせる高貴な美貌がガラスと擦れて不細工に歪む眺めも牡の本能を刺激し、燃え上がらせずにはおかない。

「ううっ、先輩、気持ちいい……僕、もう射精しそうです！」

どんなに我慢しても、もう限界だった。

一抜きごと、一差しごとに、こらえがたい吐精への欲望が高まってくる。ぬめる膣



肉と肉傘が擦れあうたびに煮沸するような恍惚が閃き、腰が抜けそうになった。時折キウンと締めまり、いつそう強い力でペニスを絞りこむ膣の反応もたまらない。

「ああん、裕君、もう出そう？ 私の身体、気持ちいい？ あっあっ……」

「き、気持ちいいです。気持ちよすぎです。ああ、先輩……」

もつともつと性器同士を擦りあわせていたのに、そうもできそうもないという切迫感が、裕のなかの野性をいつそういきり立たせた。

あまりに激しく股間を叩きつけたせいでうつつすらと赤くなった尻肉をまたも左右に割り、剥き出しになった尻毛を摘んで引つ張る。

「あはあ、またお尻の毛。それいや。それいやああ……ああんあんあん」

「ううっ、先輩、こ、興奮する……」

尻毛を引つ張りながら媚肉をペニスで掻き回すと、遥香の淫声はさらに取り乱し、けたたましく跳ね上がった。射精感が一気に高まり、耳の奥でノイズが響く。

シャワーがスコールのような音を立て、絶頂寸前の裕と遥香の裸体を叩いた。

真っ赤な血と白濁した愛蜜が混じりあった汁が媚肉から溢れ、遥香のむちむちした色白の内股をゆつくりと伝い流れていく。

「あん、だめ、恥ずかしい。そんなことされたら私……あっあっ、ふはああ……」

(な、何て可愛い喘ぎ声……)

遥香の艶やかなよがり声を耳にし、裕の我慢はとうとう臨界点を越えた。

「ああ、先輩。気持ちいい。射精する！」

「ふわああ、裕君！ なかに……なかに出して！」

「えっ。い、いいんですか？ あっ、あっ……」

「あふう、へ、平気……今日安全日なの。あっあっ、あん、裕くうん！」

「せ、先輩！」

遥香の思わぬ言葉に、絶頂寸前の裕はいつそう感激し、興奮した。全身に鳥肌が立ち、陰囊のなかで煮立った精液が出口を求めて尿道をせり上がってくる。

「遥香先輩！ ああ、出ちやう！ 精子出ちやううう！」

「あああ、裕君！ あはああ！ ああああああッ!!」

稲妻に貫かれたような衝撃が身体を震撼させた。目の裏で白い光が閃き、頭のなかまでもが白濁して何も考えられなくなる。

ペニスは、根元までズッポリと遥香の媚肉に突き刺さっていた。

ドクンドクンと逞しく脈動して精液を飛び散らせるたびに、陰茎を飲み込んだ陰肉の丸い輪が一緒になって大きくなったり小さくなったりする。

紬はポロシャツを丁寧に畳むと、洗面所の脇にある脱衣籠に身を屈めて置いた。こんな淫らなストリップを目にして、平常心でいられるはずがない。股間がジンジと甘酸っぱく疼き、陰茎が海綿体を膨らませて雄々しく反り返りだす。

(いよいよだ)

スカートの脇の部分に手を伸ばした紬が、躊躇したように動きを止める。

(お、お願い。ためらわないで)

祈るような気持ちで、磨りガラスの向こうを見た。

紬はもう一度大きく息を吐くとスカートのファスナーを下ろし、ボタンをはずす。すとん、とスカートが床に落ち、魅惑の股間が露わになった。

(ああ、すごい……)

シヨーツはブラジャーと同じ色に見えた。裕は目を剥いた。衣服の上からでも分かっていたことだが、紬の臀部の張り出し方は尋常ではなかった。

細いウエストがえぐれるようにくびれたかと思うと、見事に実りきった豊満なヒップともっちりしたふとももが圧倒的量感で張り出している。

裕のペニスさらさらにくくムクと血を集め、完全に勃起して天を向いた。

どうしようかと戸惑ったが、隠そうとしたところでどうにもならない。手で隠すこ

とすら放棄し、勃起ペニスを堂々と晒して袖を出迎えることにした。

(来るぞ)

胸と股間を隠すだけのセクシーな下着姿になった袖は、スカートを畳んで脱衣籠に入れると、覚悟を決めたように浴室のドアに近づいた。

裕は慌ててドアに背を向け、盗み見などしていなかったふりをする。

「お、お待たせいたしました」

おずおずと言いながら、袖がドアを開け、ついに姿を現した。そのとたん、苺シエイクのような甘ったるい匂いが風呂の中いっぱいに香り立つ。ほとんど裸も同然の状態まで肌を晒したことで、女体から滲み出す芳香は段違いに濃厚なものになっていた。

「あ、うん。それじゃ、お願い」

裕は袖の女体が放散する得も言われぬ芳香にうっとりしつつ、ボディソープのボトルとスポンジを背後の家政婦に渡した。

「はい。失礼、します……」

袖は背後に膝立ちになると風呂桶に湯船の湯をすくい、裕の背中にそっとかけてすべらかな手で肌をなぞった。それだけで、ペニスがピクンと脈打ってしまう。

目の前の壁に、鏡があった。そこに映った袖の顔は羞恥と緊張のせいで紅潮し、可

哀想なほどこわばっている。

ボトルのポンプヘッドを押した。スポンジにソープを取り出し、手を使って泡立てる。そうやって動くたびに、ブラジャーに包まれた巨乳が肉を揺らした。

かなり大きなカップのブラジャーだったが、包まれた肉実はいかにも窮屈そうだ。
(ううっ、たまらない)

裕は肉棒を握りしめてしごきたい衝動を必死に抑えた。そんな少年の細い肩に片手を置き、紬は泡まみれのスポンジを背中に擦りつけ始める。

「痛かったら、おっしゃってください」

必死に平静を装っていたが、声が可愛く震えていた。スポンジは裕のうなじのあたりを丁寧に洗い、円を描く動きで肩から背中、腰へと下りていく。

「っ、強すぎませんか？」

「ううん、気持ちいいよ」

股間では、雄々しく屹立した肉棒がなおも疼き続けていた。いつ紬に気づかれるかと思うと、胸のドキドキが高まる。

「ね、ねえ。こういうこと頼む『ご主人様』って、他にもいた？」

「え？ あ、いえ……初めてです」

「……だよね」

何かしゃべらなければと思って口にした話題だったが、恥の上塗りをする展開になりそうで慌ててやめた。やはりこんな奉仕を頼むこと自体おかしいに決まっている。

(でも……ああ、僕もう、どうにも我慢が……!)

裕の理性は、半裸の年上美女に背中を流してもらおうという、十八歳の少年にはパラダイス以外の何ものでもないエロチックなシチュエーションに崩壊寸前だった。

「ご主人様、痒いところとか……あの、もう少し洗ってほしい場所はございますか？」
ひと通り背中を洗い終えた紬が、おずおずと聞いた。

(ああ、もうだめだ……)

「紬さん。あの、よかつたら、ま、前も……洗ってもらえないかな」

言ってしまった——裕はギョツと目を閉じ、心臓をバクバクと脈打たせた。

「——えっ。あつ!」

驚いたように鏡のなかの裕を見た紬は、少年の股間で猛る牡の生殖器にようやく気づいた。可憐な美貌が、いつそう真つ赤に染まる。

「ご、ご主人様」

「ごめん。でも今さら隠してもしようがないなって。紬さんに身体を洗ってもらえる

つて思ったら、こんなになっちゃったんだ。お願い、ここも洗ってもらえない？」
もはや恥も外聞もなかった。正直に言うなら、くるりと身体を反転させ、すぐにも袖にむしゃぶりつかないでいるだけでも自分を褒めてやりたい気分だ。

「ううっ……」

「紬さん。今日だけ。一度だけでいいから。ね？ お願い」

うつむいてもじもじする家政婦に、もう一度懇願した。紬は、清楚な美貌を凄艶な薄桃色にして戸惑い続けた。だがやがて、意を決した顔つきで裕を見る。

「ご主人様。今、お付き合いをされている方はいらっしゃいますか？」

思いがけない問いに、裕は口を「え」の形にしたまま絶句した。脳裏に、デレのスイッチが入った遥香の愛くるしい笑顔が蘇る。

「い、いないよ、そんな人」

心のなかで遥香に手を合わせて詫びながら嘘をついた。

身勝手に都合のいい思いこみだったろうか。恋人の有無を尋ねる紬の顔に、「いいでほしい」と願うような切迫したものを感じた気がした。

「それなら……ご命令に従います」

「えっ。紬さん……あつ」

鈴の鳴るような声は、さつきよりさらに震えていた。紬は背後から女体を密着させ、スポンジを持った手をおおずおおずと裕の股間に伸ばす。

ブラジャーこそつけていたが、柔らかな乳房がぐにやりと背中をつぶれ、紬の体重が乗った。よほど恥ずかしいのか、紬の身体は体温が上がり、まるで発熱でもしているようだった。ためらいがちに伸びてきたスポンジが裕の股間に押しつけられる。

「あつ。ううつ、紬さん……」

「あつ、い、痛かったですか？」

「違う。そのまま。そのまま擦って」

スポンジで怒張を擦られただけで、電気を流されたような甘やかな痺れが股間から全身に爆ぜた。陰茎がヒクンと脈動する。鏡のなかの紬の顔はホオズキみたいに赤かった。「ううつ」と小さく呻き、ぎこちない手つきで陰茎を洗い浄める。

（ああ、スポンジがちんちんに擦れて気持ちいい。それに、紬さんのおっぱいが背中です。プニプニいって、たまらない……）

怒張は、あつという間に白い泡まみれになった。裕は真綿で首を絞められるような息苦しさからられ、我慢できずにとうとう紬に懇願する。

「つ、紬さん。スポンジじゃなくて……て、手で、直接触ってくれない？」

「えっ！ あ、あの……!？」

「お願い！ おちんちん、触つて。僕もう、おかしくなりそうなんだ。約束が違うって分かってる。でも、このままじゃ変になっちゃう」

せつない思いを言葉に込めて訴えた。鏡のなかの絨が下唇を噛みしめる。

「ご命令、なんですよね」

「命令だったらしてくれるの？ それなら命令。でも気持ち的には心からのお願い」

「……わ、分かりました」

硬い声だった。しかしそこに嫌悪の色を感じなかったのは、これもまた自分に都合のいい勝手な思いこみだろうか。絨はスポンジを置き、泡まみれの手を勃起に伸ばした。ヌルヌルした細かい指がギュッとペニスを握る。

「あううっ……」

ドクン——思わず怒張が脈動し、尿口から濃密な先走り汁が溢れた。

「ううっ、ご主人様。すぐく熱くなってます。平気ですか？」

「お願い。そのまましごいて。石鹸の泡を潤滑油がわりにして上下に擦って」

「え、えっと。あの、こう、ですか？」

おそるおそる、絨がペニスをしごき始めた。ブクブクとソーブがさらに泡立ち、白

魚みたいな指が上へ下へと動いて棹の部分の擦り立てる。

（ああ、何て気持ちいいんだ）

次から次へと先走り汁が溢れ出し、亀頭を伝って棹に流れた。だがたっぷりのソープのせいで、紬は手を穢されたことにも気づかない。

（もつと、もつと気持ちよくなりた）

「ね、ねえ。紬さんって、こういうことした経験、ある人？」

甘酸っぱい快感にとろける心地になりながら紬に聞いた。

すると紬は「えっ」と目を見開き、すぐに顔を背けて弱々しくかぶりを振る。

「男の人の……あの……こんな状態のものを見るのも、は、初めてです」

「えっ」

（つてことは、紬さん、処女なのか。ああ、僕、こんなに可愛い……しかも処女の女の人に、とんでもないことさせようとしてる）

「お願い。もう二つだけおねだりしていい？ つていうか、め、命令！」

しこしこ肉棹をしごかれる快感に鉛のように理性をとろけさせつつ、裕はどんどんわがままになっていく。

「な、何でしよう……」

「ちんちんの先。亀頭っていうんだけど、ぷっくり膨らんでるところ、分かるよね？」
「は、はい……」

「男はそこが一番気持ちいいの。よかったら、そこを重点的にしごいてくれない？」
そう頼むと、紬はか細い声で「かしこまりました」と答えた。裕はそんな紬に間髪容れず、「それともう一つ」と言葉を継ぐ。

「ブラジャー、取って」

「えっ!!」

「お願い！ 紬さんのおっぱいがさつきから気になって。できれば、直接背中に擦りつけて、おっぱいで背中を洗いながら亀頭をしごいてほしいんだ。あ、命令！」

紬が動揺したことがはつきりと分かったため、裕は「命令」という言葉をもう一度持ち出して哀訴した。ペニスをしごいていた指が止まり、紬が小さく呻く。

「っ、紬さん。命令！」

「ううっ、か……かしこまりました」

紬は観念したようにまたも大きく息を漏らした。肉棒から手を離す。両手を背中に回した。ブラジャーのホックがはずれる音がする。

ハラリ——肩から二つのストラップが二の腕に落ち、ブラカップがずり落ちた。

(うおっ。おっ、おおお)

鏡のなかに、とうとう生乳房を露わにした紬の姿が現れた。窮屈な下着から解放された乳房がブラブラといやらしく揺れ、豊満な肉実同士を打ちつけあう。

(紬さん。乳首、すごい綺麗なピンク色。ああ、乳輪も……)

色白の豊乳に、淡い桃色の乳輪と乳首がよく似合っていた。乳首は半勃起状態で、乳輪のなかから中途半端に飛び出している。

(め、命令という形でお願いすれば、エッチなお願いでも聞いてくれるかな)
舞い上がった裕は、魔法の呪文を手に入れたような心地になった。

「ご主人様、では改めて、失礼します」

緊張した声で言うと、紬は再び裕の背中に女体を押しつけ、手を回して勃起ペニスを握った。ツルツルしたマシユマロのような巨乳が背中を圧迫して、柔らかくつぶれた。やはり下着越しなどとは全然感触が違う。

(あ、温かくて、柔らかい。乳首が、ちょっとだけ背中に食いこんで。あつ……)

紬はたふたふと揺れ踊る乳房を裕に押しつけたまま、再び手コキの奉仕を始めた。

最初はさつきと同じように棹の部分をしごいていたが、ほどなく指が移動し、カリ首をシュッシュと擦りだす。

「あつ、あああ」

「平気ですか、ご主人様？」

裕が呻くと、紬は慌てて手を止めた。

「やめないで。そのまましごいて。気持ちいいんだ。め、命令……」

「は、はい。んっ……」

すべすべした指が、たつぷりの泡を潤滑油にして亀頭を擦り立てる。

「も、もう少し、丸めた指の輪を小さくして」

「こうですか？」

「あつ、そ、それ。それぞれ。ううっ、気持ちいい」

鈴口を包み込むにはかなり窮屈な指の筒ができた。紬の手が亀頭を行ったり来たりするたびに甘酸っぱい煮沸感が湧き、恍惚の悪寒が背筋を駆け上がる。

「気持ちいいよ、紬さん。ごめんね、変なことやらせて。でもすごく嬉しい。ああ」
感謝しながら、つい少女のように喘いでしまう。

「ご主人様。き、気持ちいいのでしたら、わたしも……嬉しいです。んんっ……」

恥ずかしそうに紬が言い、ペニスをしごきながらいやらしい拳措で双子の乳房を背中に擦りつけた。柔らかな肉のマシユマ口と、小さな二つの突起が背中を撫でる感触



に、裕はまたも快感の溜息を零す。

手コキにしても、乳房を背中に擦りつける動きにしても、巧みというにはほど遠い。しかし紬は意外にも、懸命に卑猥な奉仕を捧げてくれた。紬にしてもらっていると、うだけでも大興奮ものだったが、その一生懸命な姿も裕の歓喜を増加させる。

「あつ、はうっ。い、いかがですか、ご主人様。んっ、んっ……」

（えっ？ 紬さん。あつ、乳房、どンドン硬くなってきた）

紬の朱唇から漏れ出す声に、どこか妖しいものが混じりだしてきた。背中に感じる乳首も、明らかに勃起を始めている。

（紬さんも、エッチなことをやらされて少し感じて来たのかな。ああ、興奮する）

必死に押し殺す秘めやかな喘ぎ声が媚薬になり、裕の射精感は一気に募った。

「気持ちいいよ、紬さん。ああ、そろそろ、射精したくなって来ちゃった」

ジンジンと亀頭を疼かせ、繰り返して全身に鳥肌を立てながらうわずった声で言った。

「どうすればいいですか？ このまましごいていいですか？」

「しごいて。できれば、もっと強く。もっと激しく」

「どうですか？ ご主人様、どうですか？」

「おっぱいも、もっといっぱい背中に擦りつけて。め、命令……ああ、気持ちいい」

裕に最後の瞬間が近づいてきたことが分かった。紬は息を乱し、拙いながらも必死な動きで肉棒をしごき、乳房と乳首を背中に擦りつけてくる。

目の前で白い光が明滅した。耳の奥で潮騒のようなノイズが高まる。紬の指でグチャグチャに揉まれる亀頭が一際大きく膨らんだ。

「ああ、気持ちいい。射精するよ、紬さん。ううっ、もう出る」

「出してください。全部出してください。ああ。あああ」

「ううっ、イク……んあああ！」

ビクンと身体が跳ねた。亀頭から、糸を引いて濃密な白濁粘液が飛び散る。

「ああ、す、すごい……」

おそらく、生まれて初めて目にするのだろう。逞しく吐精を始めた裕のペニスに、紬は嘆声を上げた。

上へ下へとせわしなく動いて鈴口を擦っていた指が亀頭を包み込んだまま止まる。

そんな紬の指のなかで膨張と収縮を繰り返す鈴口が、そのたびにどびゅどびゅと、大量の精液を勢いよく撃ち出した。生臭い、栗の花のような匂いが浴室いっぱい立ちこめる。噴き出した精液が目の中の鏡や壁をビチャビチャと叩いて四散した。

「くうう、紬さん……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!